

第

4

章

大 間 町 史



産業経済

## 1 農家戸数・農家人口と耕地面積等の推移

**農家戸数と農家人口の推移** 我が国では高度経済成長期に工業化と都市化が進んだため、第1次産業の従事者は急速に減少していきました。

大間町では、昭和50年（1975）の農家戸数は846戸、農家人口は4,375人でしたが、平成2年（1990）の農家戸数は469戸、農家人口は2,085人と、ほぼ半減しています（**図表4-1**）。平成に入ってから減少傾向は一貫して進み、平成27年（2015）には農家戸数132戸、農家人口85人と、農業就業規模は大幅に縮小しました。農家戸数は総世帯数の約6%に過ぎず、農家人口のわずか1.6%です。132戸の農家のうち、約8割は自給的農家で販売農家はわずか27戸に過ぎず、そのうち専業農家は9戸、第1種兼業農家1戸、第2種兼業農家17戸という内訳となっています。

また、販売農家の農家就業人口34人のうち60歳未満（平成27年時点）は約12%に過ぎず、農業者の高齢化が進んでいることがうかがえます。

このように大間町における農家人口は昭和50年（1975）のわずか1.9%ほどに縮小してしまったうえ、高齢化と後継者不足が続く中、現在も縮小傾向が続いています。

**図表4-1 農家戸数と農家人口の推移**

年	区分	戸数			世帯員		
		総世帯数 (一般)	農家戸数	比率	総人口 (一般)	農家人口	比率
昭和50	世帯	1,777	846	47.6	7,739	4,375	56.5
昭和55	戸	1,901	720	37.9	7,624	3,561	46.7
昭和60	%	1,998	616	30.8	7,486	2,861	38.2
平成2	人	2,097	469	22.4	7,125	2,085	29.3
平成7	人	2,092	316	15.1	6,606	1,267	19.2
平成12	%	2,210	213	9.6	6,566	849	12.9
平成17	人	2,158	203	9.4	6,212	195	3.1
平成22	人	2,636	174	6.6	6,340	158	2.5
平成27	%	2,161	132	6.1	5,220	85	1.6
下北地域 (27)	人	30,920	1,331	4.3	74,459	1,365	1.8
青森県 (27)	%	510,948	44,781	8.8	1,308,649	130,834	10.0

資料：総世帯数（一般）及び総人口（一般）は国勢調査、農家戸数及び農家人口は農林業センサス

注：平成17年以降の農家人口は、調査内容の変更により、「販売農家のみ」の人数となっている。

**耕地面積・作付面積の推移** 大間町の昭和50年（1975）における耕地面積は504haでしたが、平成2年（1990）には405haと約2割減少しました。平成以降は、平成12年（2000）には359ha、平成27年（2015）は325haと、微減を続けています（[図表4-2](#)）。

耕地を種類別に見ると、平成17年（2005）は牧草地が215haと全体の65.2%を占め、次いで普通畑73ha（22.1%）、水田42ha（12.7%）という構成です。

農家一戸当たりの面積は平成2年（1990）の0.86haから平成27年（2015）は2.46haと、下北地域の4.36haの半分程度であり、小規模農家が減少しているといえます。

平成29年（2017）の大間町の農業粗生産額は約7,000万円であり、そのうち肉用牛で6,000万円を占め、耕種はわずか1,000万円（米）に過ぎません。野菜類のほとんどは出荷されずに自家消費や地域内消費に向けられているのが現状です（[図表4-3](#)）。

現在、全国的に希少となった「三円薯（原名：バーモント・ゴールド・コイン）」という馬鈴薯の品種を栽培し、「オコッペいもっこ」の商品名で主に地域内消費が現状でありました。この「三円薯」は、明治38年（1905）に青森県がアメリカから導入したもので、白米1俵5円30銭した時代に6個で3円もしていたことが、その名の由来です。これまで産業祭などで販売していましたが、大間町では栽培方法や多品種の作付増加、栽培者の高齢化による作付面積の減少など厳しい状況が続いたことから、組織を立ち上げることにより歴史と伝統ある希少品種の産地として、担い手の育成と地域経済の活性化につながるよう連携して取り組んで行けるよう、平成25年（2013）6月20日、大間町、大間町農業委員会、十和田おいらせ農業協同組合、大間町野菜部会、青森県下北地域県民局地域農林水産部、イオンリテール株式会社の6者による「大間町オコッペいもっこ振興協議会」を設立し、趣意書を締結しました。この締結により食文化継承に向けた取り組みがイオンリテール(株)と提携して全国に向け販路拡大し販売が始まりました。

**図表4-2 耕地面積の推移**

年	区分	総面積 ha	田 ha	畑				農家1戸当 たり面積 ha
				計 ha	普通畑 ha	牧草地 ha	樹園地 ha	
昭和50		504	82	422	178	243	1	0.60
昭和55		409	72	337	108	229	0	0.57
昭和60		400	70	330	106	224	—	0.65
平成2		405	70	335	95	240	—	0.86
平成7		381	64	317	87	230	—	1.21
平成12		359	55	304	74	230	0	1.69
平成17		330	42	288	73	215	0	1.63
平成22		327	41	286	—	—	—	1.88
平成27		325	41	284	—	—	—	2.46
下北地域（27）		5,809	1,619	4,191	—	—	—	4.36

青森県 (27)	153,300	81,200	72,100	—	—	—	3.42
----------	---------	--------	--------	---	---	---	------

資料：農林水産省統計部「耕地面積調査」

注：農家1戸当たり面積の農家数は農業センサスを利用した。

平成22年以降の畑の面積が一本化されている。

図表4-3 農業粗生産額（農業産出額〈推定〉）の推移

（単位：千万円）

区分		年	昭和50	55	60	平成2	7	12	17	27	29
合計			221	19	21	19	12	14	8	5	7
耕種	計		162	7	14	13	9	12	6	1	1
	うち米		58	—	8	6	4	2	1	0	1
	うちいも類		40	3	3	4	2	4	3	0	0
畜産	計		59	12	7	6	3	2	2	4	6
	うち肉用牛		22	5	5	5	3	2	2	4	6
生産農業所得			132	2	8	7	6	6	3	—	—

資料：市町村別生産農業所得統計累年統計、市町村別農業算出額（推計）

注：昭和50年から平成17年までは農業粗生産額、平成27年は農業産出額（推計）

## 第 2 節

## 畜産業

## 1 大間牛のブランド化

**畜産業の成長** 畜産業は大間町の農業分野では主力となっています。

大間町では昭和40年（1965）、大間牧場が開拓され、以降、肉用牛の生産振興を図ってきました。畜産団地としては、町管理の内山（70ha）、二ツ石（73ha）、奥戸（41ha）の3団地を数える団体営草地開発事業、昭和60年（1985）からは下北西部地区営畜産基地建設事業、平成4年（1992）には公共牧場機能強化事業などが実施されました。

内山牧野に設置された大間町繁殖育成センターは、管理技術の指導、種用牛の管理、など畜産振興の拠点となっています。繁殖育成センターでは、外国産ヘレフォードの導入、その後黒毛和種への転換など安価な輸入畜産物への対抗策に力を注いできました。

**大間町畜産農業協同組合** 大間町には、畜産関係の団体として昭和29年（1954）に組織された奥戸養豚組合と大間養豚組合があり、大間養豚組合は昭和32年（1957）、販売・指導・繁殖体制の強化を目指し大間地方養豚農業協同組合を組織しました。豚の市場価格は低迷し経営は苦しく、組織も弱体であり、農家はより市場価値の高い肉牛の飼育へと展開していくこととなります。昭和40年（1965）、大間地方養豚農業協同組合は事業内容を「豚」から「家畜」の生産に改め、奥戸養豚組合を包括した大間町畜産農業協同組合として、同年5月、新たに発足しました。

昭和44年（1969）に310人だった組合員は、養豚の取りやめによって激減し、一時は増えた肉牛肥育農家も減少に転じましたが、近年、大間牛のブランド化によって新しい担い手が相次いで誕生、令和3年（2021）現在は肉牛肥育農家2戸、肉牛219頭、繁殖雄牛141頭を飼育する組合となっています。

畜産農業協同組合の歴代組合長は、[図表4-4](#)のとおりです。



大間町繁殖育成センター



大間町畜産農業協同組合事務所（大間町資料展示施設内）

図表4-4 大間町畜産農業協同組合 歴代組合長

歴代	氏名	在任期間
初代	山崎 千里	昭和32.3.29 ~ 不明
2代	大見 義美	不明 ~ 不明
3代	目時正五郎	不明 ~ 不明
4代	浜端 利秋	不明 ~ 不明
5代	小浜 幸男	不明 ~ 不明
6代	新田 彦一	不明 ~ 不明
7代	清水 潔	平成3.3.19 ~ 平成14.2.23
8代	新田 彦一	平成14.2.23 ~ 平成23.2.22
9代	能戸 正吾	平成23.2.22 ~ 平成29.2.22
10代	南 隼人	平成29.2.22 ~ 現在

**大間牧場** 北奥の地は古くから名馬の産地として知られ、藩政時代には南部盛岡藩の藩営の「九牧」の一牧場として田名部通り奥戸野と大間野が優良馬の放牧地としてありました。

厳しい寒さと粗食に耐え育てられた野性的な馬は、日清・日露戦争でも大きな功を立てたといわれています。この牧場の一部は昭和期に入って、戦中、戦後においても大間野組合（後に大間産馬組合に名称変更）員が飼育した軍馬や農耕馬の放牧地として利用されてきました。七郎平の大間野には馬の水飲み場や種馬の飼育小屋があり、産馬組合が昭和25年（1950）まで管理運営に当たっていました。

戦後の農地改革により、食糧増産のための畑の開墾が行われ、牧場地のほとんどが農地に変わり、二つの野はその姿を消しました。

それに変わって昭和40年（1965）に牛の放牧地として旧大間野の一部で山林地帯の大間内山（西吹付山も含む）を解放・開拓し、できたのが内山牧野で、通称「大間牧場」と呼ぶようになりました。

大間町での牛の飼育は、大正3年（1914）に馬の価格が暴落し、時を同じくして牛が高騰したことから、赤べこ（日本短角種）の飼育を開始したことが、牛飼育の始まりです。昭和44年（1969）、大間町は内山牧野に大間町繁殖育成センターを設置し繁殖事業を開始しました。現在は町営牧場として、黒毛和種の大間牛を肥育しています。

**大間牛** その気候風土から厳しい農業環境の大間町では、畜産の方が有利との考えから、昭和40年（1965）以降、肉用牛の生産振興を図ってきました。昭和51年（1976）には、大間町牧野組合が設立され、大間牛の飼育に取り組んでいます。同年11月、青森県を代表して東北ブロック共進会に出場し、優秀賞を獲得しました。

昭和60年（1985）の肉用牛の肥育頭数は300頭を超えていましたが、安価な輸入牛肉が流通するようになると、肥育農家は次々と姿を消し、高齢化の進んだ繁殖農家がわずかに残るのみとなってしまいました。

平成29年（2017）、大間町は黒毛和種の大間牛に「陸まぐろ」と名付け、ブランド化を目指すこととしました。現在、大間町繁殖育成センターが飼育を手がけ、大間町として約30頭を飼育しています。枝肉はA4評価、1 kg当たり2,200円ほどで落札され、最高等級のA5評価を受けたこともありました。

現在、大間牛を食することができるのは、大間町で開催される年2回のイベントと、町内の宿泊施設「大間町海峡保養センター」のみと、町内のみの流通となっています。いつの日か、全国的なブランドとして多くの人々に愛される日が来ることを期待したいところです。



展望台から見る大間牧場と牛放牧の様子

### 第3節

# 林業

## 1 林業

**下北森林管理署大間森林事務所** 明治維新以降、山林行政は幾多の変遷を経て現在に至っています。旧盛岡藩の広大な山林原野の大部分は国有林に編入されて、民部省の所管となりましたが、明治7年（1874）に内務省地理寮、次いで同省山林局の所管に移されました。私有・共有の証文のない山林は、すべて国有林に編入されたため、権利をめぐり官と民の間に紛争が続出することとなりました。そこで、政府が実施したのが、明治9年（1876）と14年の山林原野等官民有区分処分法の制定です。

その後、大正14年（1925）に営林局署官制が制定され、大間地域は大畑・佐井両営林署に所属しましたが、昭和4年（1929）5月、大奥村と風間浦村、大畑村の一部を管轄とする大間営林署が大奥村大字大間に新設されました。

平成4年（1992）3月、大間営林署と佐井営林署が統合し、大間営林署と大間営林署佐井森林経営センターに改組されました。

平成11年（1999）3月、抜本的改革による組織再編に伴い、青森営林局が秋田営林局と統合され、東北森林管理局青森分局となり、川内・脇野沢・大間・大畑の各営林署は下北森林管理署の事務所となりました。



下北森林管理署大間森林事務所

平成16年（2004）3月、組織再編に伴い、大間事務所が下北森林管理署に統合され、下北森林管理署大間森林事務所として現在に至っています。

**歴代営林署長等** 平成期以降の歴代営林署長、組織再編後の下北森林管理署大間事務所長、首席森林官、地域統括森林官は図表4-5～4-8のとおりです。

図表4-5 大間営林署長

歴代	氏名	在任期間
27代	笹岡 哲也	昭和62.4 ~ 平成元.3
28代	松崎 教	平成元.4 ~ 平成3.3

29代	宮家 善晴	平成3.4 ~ 平成5.3
30代	清水 大裕	平成5.4 ~ 平成7.11
31代	野宮 豊元	平成7.12 ~ 平成11.2

図表4-6 下北森林管理署大間事務所長

歴代	氏名	在任期間
初代	佐々木勝彦	平成11.3.1 ~ 平成13.11.30
2代	市川三千昭	平成13.12.1 ~ 平成16.3.31

図表4-7 下北森林管理署大間森林事務所首席森林官

歴代	氏名	在任期間
初代	阿部 利行	平成16.4.1 ~ 平成20.3.31
2代	嵯峨 高	平成20.4.1 ~ 平成22.3.31
3代	佐藤 好明	平成22.4.1 ~ 平成25.3.31

図表4-8 下北森林管理署大間森林事務所地域統括森林官

歴代	氏名	在任期間
初代	佐藤 好明	平成25.4.1 ~ 平成26.3.31
2代	柳舘 恵一	平成26.4.1 ~ 平成29.3.31
3代	落瀬 勝重	平成29.4.1 ~ 令和3.3.31
4代	三浦 利樹	令和3.4.1 ~ 現在

**森林資源情報** 大間町の森林面積は3,873haで、町面積の約75%を占めていますが、そのうち  
 民有林面積は593ha、国有林面積は3,280haです(図表4-9)。森林面積に占める国有林の割合は、  
 約85%となっています。このように大間町の林業は、国有林に対する依存度が高く、林業経営  
 の場としては、古くから国有地に分収林を設置する、いわゆる部分林を設定してきました。

図表4-9 保有者形態別森林面積の状況

(単位: ha)

保有形態	総面積		立木地面積			人工林率 (B/A)	
	面積(A)	比率	計	人工林(B)	天然林		
総数	3,880	100.0	3,880	1,021	2,859	26.3	
国有林	3,287	84.7	3,287	790	2,497	24.0	
公有林	計	200	5.1	200	85	115	42.5
	都道府県有林	29	0.7	29	29	0	100
	市町村有林	171	4.4	171	57	114	33.3
	財産区有林	0	0.0	0	0	0	0.0
私有林	393	10.1	393	143	250	36.3	

資料: 令和3年度青森県森林資源統計書

## 1 漁業経営体数・就業者数・漁船数の推移

**漁業経営体** 漁業は、長い間、大間町の基幹産業であり続けてきました。

令和3年（2021）3月に策定された「第6次大間町総合計画」では、大間町の水産業の現状・課題について、「基幹産業である漁業を含む第一次産業は、就業者の減少が顕著で、高齢化も一層進展しており、50歳以上が約7割を占める」とされています。また、主力のマグロ漁についても「漁獲規制により、従前の漁獲増が期待できない状況に加え、海水温上昇等による不漁、全般的な魚価の低迷等、漁業を取り巻く環境は一層悪化」「新たな担い手の発掘・育成の実施が必要」と記されました。

昭和60年（1985）漁業センサスにおける大間町の漁業経営体数は697経営体でした。平成に入ると、平成10年（1998）656、平成15年（2003）557、平成20年（2008）578、平成25年（2013）474、平成30年（2018）313と推移し、約30年間で半分以下に減少しています（[図表4-10](#)）。

平成30年（2018）の経営体数を階層別に見ると、動力船3～5t階層が155経営体で全体の約半数を占め最も多く、5～10t階層が43経営体（13.7%）、1～3t階層が27経営体（8.6%）、10～20t階層が22経営体（7.0%）です。この構成を県全体と比較すると、小型動力船の割合が多くなっています。また、1t未満階層は平成15年（2003）の143経営体から平成30年（2018）は2経営体、1～3t階層が平成15（2003）年の134経営体から平成30年（2018）27経営体へと激減し、5t以上はほぼ横ばいとなっています。経営体組織別は一例を除き、すべて個人経営体です。また、専・兼業別では、経営体の約79%が専業経営体で、平成10年（1998）の約33%から大きく割合を伸ばし、兼業経営体が激減しました。

**漁業就業者数** 平成30年（2018）の大間町の漁業就業者数は512人で、平成15年（2003）の974人と比べて約52.6%に減少しています（[図表4-11](#)）。男女別に見ると、男子が383人、女子が129人です。男子の就業者を年齢階層別に見ると、65歳以上階層が182人で全体の47.5%を占め最も多く、40歳未満は9.7%と若年・中堅就業者は少ない構造にあります。

平成15年（2003）の状況を見ると、65歳以上は31.1%であり、15年間の間に漁業就業者の高齢化が急激に進んだことが分かります。

**漁船数** 平成10年（1998）における大間町の漁船数は886隻です。その内訳を見ると、船外機付船が377隻で全体の42.6%を占め、これに3～5tの動力船が242隻（27.3%）、1～3tの動力船が195隻（22.0%）となり、5t未満の小型動力船数が全体の92%を占めていました。

平成30年（2018）の漁船数は435隻と、20年間で半減しています（[図表4-12](#)）。内訳につい

ては船外機付船が168隻（38.6%）、3～5 tの動力船が171隻（39.3%）、5～10 tの動力船が40隻（9.2%）、1～3 tの動力船が30隻（6.9%）となり、1～3 tの動力船の割合が大幅に減少し、3～5 t、5～10 t、10～20 tの動力船の割合が増加するなど、船の大型化は平成期を通して緩やかに進んできました。10～20 tの動力船は19隻あり、主に太平洋・日本海の沖合でのイカ釣り漁業に従事するなど、漁場の遠隔化が漁船の大型化につながっています。

図表4-10 漁業経営体数の推移

漁業経営階層別		大間町					青森県
		平成10年	平成15年	平成20年	平成25年	平成30年	平成30年
経営階層別 経営体数 ※ t 数表示 は船外機付 漁船	計	656	557	578	474	313	2,742
	動力1 t未満	194	143	1	—	2	33
	1～3 t	169	134	112	37	27	185
	3～5 t	221	217	241	203	155	630
	5～10 t	51	44	39	41	43	193
	10～20 t	20	19	23	19	22	147
	20～30 t	—	—	—	1	1	16
	30 t以上	—	—	—	—	—	29
	小型定置網	1	—	—	—	—	395
	その他	—	—	162	173	63	1114
経営組織別 経営体数	個人経営	656	557	578	474	312	
	共同経営	—	—	—	—	—	
	その他の経営	—	—	—	—	1	
専業・兼業 別経営体数	専業	217	264	372	301	246	
	第1種兼業	134	177	53	76	43	
	第2種兼業	305	116	153	97	23	

資料：青森農林水産年報

図表4-11 漁業就業者数の推移

(単位：人)

年齢	区分	平成15年			平成20年			平成25年			平成30年		
		男性	女性	計									
15～19歳		10	1	11	8	0	8	5	0	5	3	2	5
20～24歳		27	2	29	22	1	23	21	2	23	7	0	7
25～29歳		26	3	29	32	1	33	23	0	23	9	0	9
30～34歳		30	9	39	35	0	35	31	1	32	6	1	7
35～39歳		45	8	53	43	5	48	39	0	39	12	4	16
40～44歳		57	17	74	45	7	52	39	7	46	44	10	54
45～49歳		78	26	104	61	17	78	45	6	51	70	15	85
50～54歳		94	43	137	87	19	106	60	10	70	70	15	85
55～59歳		61	28	89	94	37	131	83	12	95	70	15	85
60～64歳		83	36	119	71	24	95	120	40	160	50	19	69
65歳以上		231	59	290	268	60	328	280	40	320	182	78	260
合計		742	232	974	766	171	937	746	118	864	383	129	512

資料：漁業センサス

図表4-12 漁船数の推移

階層	区分	大 間 町										青森県	
		平成10年		平成15年		平成20年		平成25年		平成30年		平成30年	
		隻数	%	隻数	%								
動力船隻数	無動力船隻数	7	0.8	3	0.4	2	0.3	6	1	4	0.9	17	0.3
	船外機付船隻数	377	42.6	336	43.4	298	40.9	269	45.8	168	38.6	2,094	43
	1 t未満	9	1.0	10	1.3	1	0.1	-	-	3	0.7	64	1.3
	1～3 t	195	22.0	140	18.1	115	15.8	39	6.6	30	6.9	260	5.3
	3～5 t	242	27.3	234	30.2	257	35.3	218	37.1	171	39.3	1,776	36.5
	5～10 t	44	5.0	39	5.0	39	5.3	39	6.6	40	9.2	388	8
	10～20 t	12	1.4	13	1.7	17	2.3	16	2.7	19	4.4	203	4.2
	20 t以上	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	58	1.2
総隻数	886		775		729		587		435		4,860		
動力船総トン数													

資料：青森農林水産統計年報

## 2 漁場の整備・施設の整備

**採る漁業からつくり育てる漁業へ** 漁業資源が減少する中、採る漁業からつくり育てる漁業への転換は全国的な課題となっています。

「第4次大間町総合計画」では、「『採る漁業からつくり育てる漁業への転換』を基本的な考え方として、主要漁獲物であるマコンブ、キタムラサキウニ、ミズダコ、スルメイカ、クロマ

グロ、エゾアワビ等の水揚げの増大と、付加価値の向上が必要である。このため、漁場の整備、増殖事業の促進、養殖事業の展開を積極的に進めていきます」としています。

**漁場の整備等** 大間町沿岸の漁場については、大間崎から風間浦村に至る東部海域は全体的に急傾斜であり、大間崎から佐井村に至る西部海域は緩い傾斜地形が広がっています。底質は一部を除き、距岸2,000mでは大部分が岩盤質、沖合は砂礫・転石などであり、こうした海底地形を反映し、沿岸域には磯根資源や岩礁性魚類が多く生息し、好漁場を形成してきました。

共同漁業権漁場内の水深30m以浅の海域は、エゾアワビ、マコンブ、ワカメ、キタムラサキウニ等の採貝藻魚場であり、水深40m海域はヒラメ、ウミタナゴ、カレイを対象とする刺し網漁場、水深50～300mにかけての海域はクロマグロ、ヒラメ、キツネメバル、ウスメバル、アイナメ、ミズダコなどの漁場となっています。また、海峡部や沖合海域では、スルメイカ、ミズダコ、ウスメバル、アブラツノザメなどの漁場となっています。

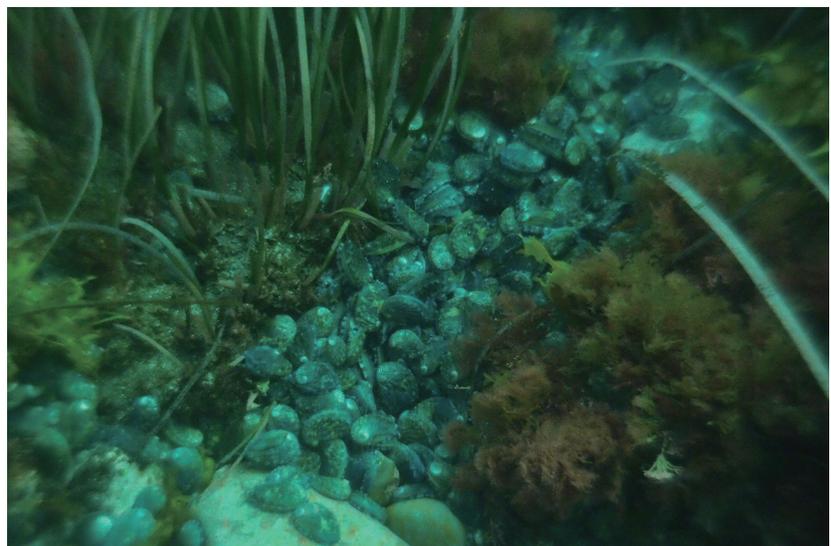
平成14～24年（2002～12）度にかけては、設備が不十分な奥戸漁港・材木漁港で外郭施設、係留施設、漁港施設用地などを整備するほか、沿岸漁場にウニの飼料海藻（コンブ）の着底基質を設置し、ウニの増殖漁場を造成するとともに、ヤリイカの産卵基質を設置しました。また、魚類を寄せ付けるための漁礁漁場を整備しました。

近年、前浜の環境変化により商品価値の低いツルアラメが増殖し、商品価値の高いマコンブやアラメコンブが減少する状況となっています。また、種苗生産したアワビの稚貝を毎年50万個放流しているにもかかわらず水揚げにつながらない等の課題を抱えているところです。

そのため、北通り種苗育成センターで生産するアワビやナマコ種苗の効果的な放流方法を調査し、漁場管理を徹底し資源の増加を図っていくこととしています。また、ツルアラメ藻場にウニを移植し身入りを良くし魚価の向上を図る、ツルアラメの活用法を検討する等の基本方針を掲げて、取り組んでいるところです。



コンブ漁の様子



アワビ稚貝の放流

アワビ、ナマコ、コンブの放流数及び漁獲高の推移は、[図表4-13](#)～[4-15](#)のとおりです。

**図表4-13 アワビ放流数及び漁獲高**

年度	名称	大間漁業協同組合			奥戸漁業協同組合		
		放流数(個)	漁獲量(kg)	漁獲高(千円)	放流数(個)	漁獲量(kg)	漁獲高(千円)
平成9		161,000	398	3,889	10,000		
平成19		357,000	516	5,000	153,000	22	161
平成29		357,000	65	493	153,000	16	127
令和2		350,000	85	647	150,000		

資料：産業振興課

**図表4-14 ナマコの放流数及び漁獲高**

年度	名称	大間漁業協同組合			年度	名称	奥戸漁業協同組合		
		放流数(個)	漁獲量(kg)	漁獲高(千円)			放流数(個)	漁獲量(kg)	漁獲高(千円)
平成19		1,000	4,753	7,496	平成17		1,000	4,599	5,497
平成29		29,800	13,688	23,829	平成29		29,800	7,842	9,177
令和2		12,000	7,129	11,650	令和2		7,600	2,404	2,850

資料：同上

**図表4-15 コンブ種系放流数及び漁獲高**

年度	名称	大間漁業協同組合			年度	名称	奥戸漁業協同組合		
		投入数(m)	漁獲量(t)	漁獲高(千円)			投入数(m)	漁獲量(t)	漁獲高(千円)
平成20	マコンブ	80	3	43,000	平成22 マコンブ	80	1	1,000	
	ガゴメコンブ	160							
平成30	マコンブ	160	92	273,000	平成27 マコンブ	100	31	33	
	ガゴメコンブ	100							
令和2	マコンブ	700	61	111,000	令和2 マコンブ	200	4	5,000	
	ガゴメコンブ	600							

資料：同上

**施設の整備** 「採る漁業からつくり育てる漁業への転換」を基本的な考え方として、平成9年(1997)4月、大間町は「北通り種苗育成センター」を開設し、アワビの種苗生産を行っています。大間原子力発電所が稼働した場合には、放出される、自然海水より最大で7℃高い温排水を活用する想定施設として誕生しました。また、人材研修センターも併設し、大間町における水産振興の核となる施設として利用されています。

また、平成9年(1997)4月、大間原子力発電



北通り種苗育成センター

所計画による地域振興施策の一環として、水産資源を鮮度の高い状態で流通させるための北通り製氷施設が整備され、運用が始まりました。

平成7年（1995）4月には、大字大間字割石の埋立地に大間町漁業活性化センターを建設しました。漁村振興の拠点となる施設で、漁業関係者を中心とし町民が研修や会合などに使用できる施設です。

図表4-16 種類別年間漁獲高ランク上位5位の推移

（数量単位：kg）

年度	平成16		17		18		19		20		21	
ランク	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量
1位	コンブ	1,254,210	ウニ	386,814	コンブ	750,631	コンブ	691,140	サメ	606,851	サメ	790,749
2位	ウニ	360,900	サメ	373,169	ウニ	322,570	スルメイカ	654,105	スルメイカ	435,242	コンブ	349,692
3位	スルメイカ	304,346	スルメイカ	368,358	サメ	304,574	サメ	371,125	コンブ	356,167	ウニ	258,817
4位	サメ	234,572	マグロ	260,813	マグロ	227,695	ウニ	340,325	ウニ	298,875	マグロ	239,489
5位	マグロ	220,863	コンブ	186,695	タコ	226,002	マグロ	319,257	タコ	283,850	タコ	232,439

年度	平成22		23		24		25		26		27	
ランク	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量
1位	サメ	779,109	サメ	837,939	コンブ	1,578,356	サメ	907,873	サメ	825,387	コンブ	1,519,853
2位	スルメイカ	287,678	コンブ	487,996	サメ	874,221	スルメイカ	419,009	コンブ	780,931	サメ	665,570
3位	その他藻類	170,968	スルメイカ	447,074	スルメイカ	368,193	コンブ	330,798	スルメイカ	273,385	スルメイカ	446,024
4位	ウニ	163,823	マグロ	184,329	マグロ	179,265	マグロ	193,525	マグロ	194,635	マグロ	228,043
5位	マグロ	163,229	タコ	112,503	ウニ	139,094	タコ	134,723	ウニ	173,442	ウニ	227,249

年度	平成28		29		30		令和元		2		3	
ランク	種類	数量	種類	数量								
1位	サメ	487,496	コンブ	633,206	コンブ	490,061	コンブ	645,796	コンブ	346,225	コンブ	569,779
2位	ウニ	253,974	サメ	375,411	サメ	281,735	サメ	248,293	マグロ	232,922	マグロ	205,733
3位	マグロ	165,979	マグロ	279,951	ウニ	167,757	スルメイカ	238,958	サメ	188,064	タコ	169,566
4位	スルメイカ	143,044	ウニ	193,028	マグロ	120,377	ウニ	207,536	タコ	111,471	サメ	143,599
5位	ブリ	119,845	スルメイカ	128,272	スルメイカ	98,999	マグロ	137,089	スルメイカ	109,709	ウニ	116,799

資料：産業振興課

### 3 漁業協同組合

**漁業協同組合の役割と現況** 漁業協同組合は、昭和23年（1948）に公布された水産業協同組合法によって定められた漁民の協同組織です。その事業内容は、漁民の生産物を販売する販売

事業からはじまって、操業に必要な燃料や漁具、養殖のえさなどを供給する購買事業、信用事業、共済事業、製氷冷凍事業、加工事業、指導事業など、多岐にわたっています。全国的な漁業協同組合経営の傾向として、漁業就業者の高齢化が進む中で、漁業経営体が減少し漁業生産は衰退しているのが現状です。大間町には、大間漁業協同組合と奥戸漁業協同組合の2漁協があります。

**戦前の漁業組合** 明治35年（1902）、新しい漁業法の公布を機に日本各地の漁民は漁業権の取得を目的に漁業組合を設立しました。この流れの中で、明治36年（1903）、大間漁業組合と奥戸漁業組合が設立されました。大正・昭和期にかけてはアワビ漁が盛んで、水産総額は下北地区でトップクラスとなっていました。昭和12年（1937）には大間漁業協同組合、奥戸漁業協同組合に改組し、漁業権の管理団体から一步進んで経済団体としての基礎と機能を持つようになります。戦時下の昭和19年（1944）、大間・奥戸の漁業協同組合は大間漁業会に統合・改組されました。

**戦後の漁業協同組合** 昭和23年水産業協同組合法が改正され、これを受けて、昭和24年（1949）4月、大間漁業会は大間漁業協同組合の設立総会を開き、翌月、青森県知事から認可を受けました。八戸・鱒ヶ沢・舟岡とともに県内初認可です。続いて、同月、奥戸漁業協同組合も発足し、2漁協体制がスタート。アワビやコンブの潜水漁法の開発、沖合漁業への転換を促すイカ釣り漁船の導入、つくり育てる漁業への転換などを推進。設立時に609人だった大間漁業協同組合は、20年後の昭和44年（1969）には880人、さらに10年後の昭和53年（1978）には838人と推移していきました。

**平成期の動向** 昭和52年（1977）12月に大間町議会で「原子力発電所誘致」が決議されたことから、大間・奥戸両漁協と、発電所計画や安全性についての勉強会をスタートし、さらに平成元年（1989）10月には北通り6漁協連絡協議会も発足するなど、具体的な交渉に備えました。平成6年（1994）5月に大間・奥戸両漁協と電源開発株式会社は、漁業補償協定を締結し、さらに同10年8月、電源開発（株）は大間・奥戸両漁協と変更漁業補償協定を締結しました。

平成初期には、奥戸漁協は漁業研究会と共同で奥戸川へのサケの稚魚放流事業を毎年4月に実施していました。奥戸小学校児童や奥戸保育所園児も参加する地区を挙げてのイベントで、平成元年（1989）には3万匹を放流しました。

密漁対策としては、平成7年（1995）7月に大間・奥戸漁協管内漁場監視システムに着工し、平成8年（1996）に完成しました。

平成19年（2007）5月のゴールデンウィークに、大間漁協婦人部が主催し大間漁協直販所で「第1回浜のチャレンジ市～大間ノナ・タゴの陣～」と題して特産品、おみやげ品の販売を行うイベントを実施しました。このイベントは同年7月にも行われるなど、恒例行事となっていきました。

大間の特産品マグロは、その一本釣りの漁法と相まってテレビなどでも有名な存在となって

いました。大間漁協では、そのマグロのブランド力をさらに向上させるべく、平成18年（2006）6月、「大間まぐろ」を商標区分第29類で出願し、同19年6月に商標登録が実現しています。

両漁協ともに信用事業で貸付金が預金額を大きく上回るなどの問題を抱え、大間漁協は平成18年（2006）、奥戸漁協は平成14年（2002）に信用事業を青森県信漁連へ譲渡しました。

令和2年（2020）12月現在、大間漁協の組合員は668人で、漁法は釣り、籠、採介藻、刺網が中心で、主要魚種はマイカ、ウニ、マグロ、コンブ、ブリ類などです。大間漁協は、近年の



旧大間漁協（昭和34年建築の組合事務所）



新大間漁業協同組合



下手浜漁港荷揚げ場



大間港荷揚げ場



奥戸漁業協同組合



奥戸漁協荷揚げ場

漁船大型化により荷揚げの際に旧冷蔵庫前の岸壁の高さと船の高さが問題視されてきたことや事務所施設の老朽化もあることから、戦前の協同組合時代から組合事務所としてきた所在地(大字大間字下手道50番地)を平成13年(2001)に下手道埋立地に変更し、新しく鉄筋コンクリート2階建ての本部事務所を建設し、現在では水産物保管倉庫4棟、集出荷漁具収納倉庫2棟、簡易加工施設1棟、共同荷捌所3棟、製氷貯氷庫5棟、石油タンクなどの施設を有しています。

令和2年(2020)の販売事業を見ると、生鮮魚介類の取扱高14億3,797万円のうちマグロが10億7,575万円と約75%を占め、ウニ、イカ、タコ、マス、カレイ、サメ、ナマコが続きます。また、水産製品加工額1億2,869万円のうち、1億1,119万円と大半を占めているのがコンブです。

一方、奥戸漁協の組合員は335人で、漁法は、釣り、採介藻、籠、刺網が中心で、主要魚種はマイカ、コンブ、エゴ、ウニ、サメなどとなっています。現在の事務所は、昭和57年(1982)12月に建設された鉄筋コンクリート2階建ての建物で、このほか荷捌所2棟、水産物保管倉庫2棟、燃油倉庫1棟、漁船上架施設1棟、漁業研修施設1棟、資材倉庫1棟を保有しています。

令和2年(2020)度の販売事業を見ると、生鮮魚介類の取扱高1億1,992万円のうちマグロが5,156万円と約43%を占めています。

図表4-17 大間漁業協同組合歴代組合長

歴代	氏名	在任期間
初代	新田松太郎	昭和24.4.19 ~ 昭和25.4.28
2代	泉 平八郎	昭和25.4.29 ~ 昭和26.4.11
3代	新田松太郎	昭和26.4.12 ~ 昭和27.2.29
4代	御厩敷末太郎	昭和27.3.1 ~ 昭和27.4.8
5代	大西善太郎	昭和27.5.13 ~ 昭和34.2.25
6代	新田 義一	昭和34.2.26 ~ 昭和42.2.25
7代	蛭子 隆	昭和42.2.26 ~ 昭和48.2.26
8代	御厩敷友吉	昭和48.2.27 ~ 昭和50.2.28
9代	大西善太郎	昭和50.3.1 ~ 昭和53.1.31
(職務代理)	竹村勝太郎	昭和53.2.1 ~ 昭和53.3.3
10代	御厩敷友吉	昭和53.3.4 ~ 昭和54.5.11
11代	浜端 利男	昭和54.5.12 ~ 昭和55.5
12代	浜端 利男	昭和55.6 ~ 昭和62.2
13代	蛭子 隆	昭和62.2 ~ 昭和63.3.5
14代	南 幸一	昭和63.3.6 ~ 平成5.2
15代	吉本 繁雄	平成5.2 ~ 平成11.3.4
16代	濱端 廣文	平成11.3 ~ 平成14.4.5
17代	南 末男	平成14.4 ~ 平成14.7.19
18代	泉 一郎	平成14.7 ~ 平成18.3.1
19代	濱端 廣文	平成18.3 ~ 平成26.12.27
20代	田中 勝	平成27.4.8 ~ 平成30.3.29
21代	坂 三男	平成30.3.30 ~ 令和4.2.14
22代	小鷹 勝敏	令和4.3.18 ~ 現在

\* 昭和23年水産業協同組合法改正後の組合長

図表4-18 奥戸漁業協同組合歴代組合長

歴代	氏名	在任期間
初代	長後佐次郎	昭和24.6 ~ 昭和25.3
2代	川崎長次郎	昭和25.3 ~ 昭和37.2
3代	小谷 清作	昭和37.2 ~ 昭和43.2
4代	小林 唯八	昭和43.2 ~ 昭和49.2
5代	小谷 清作	昭和49.2 ~ 昭和54.2
6代	笹谷 賢治	昭和54.2 ~ 昭和55.2
7代	岩泉 長孝	昭和55.2 ~ 平成15.3
8代	坂本 勝雄	平成15.3 ~ 平成16.6.5
9代	佐々木国光	平成16.6 ~ 平成22.11
10代	宮野 昭一	平成22.11 ~ 現在

\* 昭和23年水産業協同組合法改正後の組合長

図表4-19 漁協組合員数の推移

(単位：人)

年	区分	大間漁協			奥戸漁協		
		正組合員	准組合員	合計	正組合員	准組合員	合計
平成7		633	270	903	223	155	378
平成8		621	277	898	268	110	378
平成9		604	294	898	229	149	378
平成10		591	297	888	244	136	380
平成11		576	282	858	257	122	379
平成12		573	272	845	206	168	374
平成13		555	282	837	207	167	374
平成14		553	276	829	241	127	368
平成15		547	272	819	226	146	372
平成16		541	267	808	207	157	364
平成17		531	266	797	183	181	364
平成18		522	268	790	202	161	363
平成19		519	270	789	204	158	362
平成20		506	278	784	208	152	360
平成21		470	313	783	187	172	359
平成22		442	315	757	180	179	359
平成23		435	331	766	171	186	357
平成24		426	334	760	172	182	354
平成25		425	336	761	145	209	354
平成26		405	328	733	150	199	349
平成27		392	332	724	132	217	349
平成28		379	337	716	102	244	346
平成29		357	350	707	99	244	343
平成30		347	349	696	97	241	338
令和元		337	347	684	99	238	337
令和2		338	330	668	101	234	335
令和3		330	342	672	102	233	335

資料：産業振興課

## 4 「大間まぐろ」

**マグロの一本釣り** 明治・大正時代のマグロ漁は、大謀網や一本釣りでした。昭和30年代になって漁船の大型化や漁具の進歩と相まって豊漁を続けることとなったのです。独特な漁法はマスコミ各社で取り上げられ、また、小説『魚影の群れ』（吉村 昭著）により、全国的に脚光を浴びました。

大間のマグロは市場で超一級品とされ、高値で取引されていましたが、昭和50年代初頭を境に魚影が薄くなり、平成4年（1992）ころまで極端に水揚げが少ない時代が続きました。海流や水温の変化をはじめ原因には諸説があり、漁師の一部には青函トンネル工事原因説も流布されましたが、県の調査では影響なしとされています。

「マグロが来た！」と、浜が約10年ぶりに活気づいたのは平成5年（1993）10月のことでした。翌平成6年（1994）には440kgの超大物が捕れました。以来、毎年100～300kgクラスのマグロが水揚げされるようになったのです。平成8年（1996）の漁獲量は170 t、4億7,800万円に及びました。

大間のマグロは、東京築地市場でも値が高く、外国産の冷凍マグロが1 kg当たり7,000円前後なのに対し、軽く数万円の値がつき、高値のため大物はほとんど大市場へ直送され、地元ではなかなか食べることができませんでした。

大間で捕れるのはクロマグロで、マグロの中では最も大型です。平均100kgのマグロが水揚げされ、漁獲シーズンは7月下旬から1月までとなっています。漁場は、大間崎の前沖5 km付近の近海です。

マグロ漁のエサには、スルメイカやアオリイカ、フクラゲ、トビウオ、サンマ、シイラ、また、擬似餌が使われることもあります。中にはトビウオを買い付けに富山県まで出向く漁師もいます。

一本釣りの漁法は次のとおりです。まず、針の先にエサや擬似餌を付けて海に投げ入れて、マグロの当たりを待つ。マグロがかかったら、引き寄せ、銚を急所のエラに突いてとどめ。引き揚げたマグロは血抜き活け締め作業を施し、鮮度を保持。エサにするトビウオやサンマのひれに針金を付けて生きているように見せる仕掛けが考案されるなど、漁の技術は進化を続けています。一本釣りの様子は、漁師とマグロの手に汗握る勝負といってもいいでしょう。時には大物を仕留めるために、数時間かかりで格闘を繰り広げることもあります。

また、夜間には、1本の幹縄に多数の枝縄を付け、枝縄の先端に釣り針を付けたスタイルの延縄漁が行われます。一本釣りにしても延縄漁にしても、網で捕獲する漁法とは異なり、そのメリットは、マグロに傷がつかないことです。

近年、船の近くまで引き寄せたマグロを電気ショッカーで失神させてから船に水揚げする漁

法が開発され、引き揚げる間に暴れて取り逃がすことが最も多かったのがこの漁法により解消されています。このように漁法は次々に進化し、一本一本のマグロを傷つけずに価値を高めて市場に送り出す工夫がされるようになってきました。

このような命がけのマグロ漁師の生き様を描いた『魚影の群れ』は、映画化（相米慎二監督）され、昭和56年（1981）6～9月には、主演の故夏目雅子さん、故緒形拳さんら出演陣やスタッフが大間町に泊まり込んでロケが行われ話題を呼びました。平成期には、平成14年（2002）4～9月に、NHK朝の連続テレビ小説『私の青空』が放映され、大間のマグロ漁師を演じた伊東四朗さんや娘役の主演田畑智子さんら出演陣やスタッフが町内でロケを行い放映されました。平成19年（2007）1月には、主演の故渡哲也さんや天海祐希さん、高橋克典さんらが大間町に実在する漁師とその家族を描いた『新春ドラマスペシャル・マグロ』（テレビ朝日と石原プロモーションの共同製作）が放映されました。

**「大間まぐろ」のブランド化** 大間のマグロは、築地の初競りで非常に高値を付けることが恒例となり、全国的に有名なブランドとなり、マグロ目当ての観光客も増えました。とはいえ、大間で捕れたマグロは築地市場に直送されてしまうため、「大間に来ててもマグロが食べられない」という声が聞こえるようになっていきます。そんな声を受けて、平成13年（2001）に町の有志によって結成されたのが、「大間活性化委員会（通称：やど会）」です。

同委員会が開催した「大間超マグロ祭り」は、大間で最高のマグロを食べてもらうイベントで回を重ねるごとに盛り上がっていきました。

そして、平成18年（2006）6月、大間漁業協同組合は他産地との差別化を図るべく、「大間まぐろ」の名称で地域団体商標を出願し、翌平成19年（2007）6月に登録されました。大間漁協から出荷されるマグロには、「大間まぐろ」のシールがブランド印として必ず貼られ、通し番号で管理されています。

「大間まぐろ」が商標登録されて以降、さらにブランド力がアップし、築地市場での高値は続き、平成25年（2013）には1匹222kg 1億5,540万円（1キロ当たり70万円）、さらに築地から豊洲へ市場が移転後の平成31年（2019）初競りには1匹278kg 3億3,360万円（1キロ当たり120万円）の値が付けられました。元号が令和に変わってからの令和2年（2020）の初競りでは、1匹276kg・1億9,320万円（1キロ当たり70万円）の値が付き、まさに「黒いダイヤ」との称



初競り3億円の大マグロ

号も大きさではありません。

図表4-20 クロマグロ漁獲量の推移

区分 年	大間漁協		奥戸漁協	
	漁獲量 (kg)	漁獲高 (円)	漁獲量 (kg)	漁獲高 (円)
平成10	81,990	391,560,525	1,906	5,079,317
平成11	52,346	248,041,185	1,305	6,702,032
平成12	97,596	504,216,548	1,693	4,298,733
平成13	153,460	720,072,370	3,077	8,948,301
平成14	130,195	614,164,179	2,349	7,804,395
平成15	109,267	524,593,306	783	2,251,559
平成16	217,452	919,884,395	3,651	7,721,844
平成17	254,244	1,001,072,192	6,605	18,470,207
平成18	232,399	1,072,589,296	6,333	20,034,368
平成19	309,777	1,602,011,406	9,522	35,528,556
平成20	237,861	1,372,639,539	8,702	39,222,878
平成21	231,860	1,210,287,046	7,570	37,680,860
平成22	159,913	821,264,077	3,548	12,389,447
平成23	177,690	931,105,169	6,643	26,534,104
平成24	175,629	953,761,121	4,306	9,746,193
平成25	188,037	949,294,089	5,488	26,292,771
平成26	185,988	1,161,399,822	7,485	50,035,377
平成27	218,044	1,338,460,072	9,900	68,016,334
平成28	154,783	1,135,226,674	12,089	117,475,909
平成29	263,693	1,544,660,255	16,257	111,943,606
平成30	114,441	1,051,348,754	13,813	74,882,858
令和元	130,924	1,505,846,816	7,827	87,397,468
令和2	226,082	1,075,748,147	9,286	51,563,145
令和3	198,914	1,103,199,465	7,364	56,652,126

\*平成19年に「大間まぐろ」商標登録  
資料：産業振興課

## 第 5 節

## 商工業

## 1 大間町商工会

**創 立** 商工会は、「商工会の組織等に関する法律」（昭和35年法律第89号）に基づき経済産業大臣の認可を受けて設立された特別認可法人です。地域の事業者が業種に関わりなく会員となって、お互いの事業の発展や地域の発展のために総合的な活動を行う団体で、多彩な小規模事業施策、中小企業施策を展開しています。

昭和20年（1945）8月14日、連合国のポツダム宣言を受諾した日本は、苦難の道を歩むこととなりました。極度の物不足と悪性インフレにより、闇市での売買が常態化していきます。正常な商業活動は望むべくもありません。昭和24年（1949）ごろになると、ようやく統制は順次撤廃され。復興が軌道に乗っていきました。有名な「もはや戦後ではない」とのフレーズは、昭和31年（1956）7月に発表された『経済白書』で指摘されたものです。

その後、日本は高度経済成長を迎え、前述のように昭和35年（1960）5月、「商工会の組織等に関する法律」が施行されたことを機に、大間町の商工業者は同年9月17日、大間公会堂で大間商工会の創立総会を開催しました。

同月、大間商工会は県下で第3番目に設立認可を得て、大間町大字大間字地崎埋立地の益城精米所内に事務所を設置。初代会長には木村力衛が就任し、165人の会員を擁してのスタートでした。

**商工会の活動** 同商工会は、昭和51年（1976）4月、「原子力発電所誘致に係る環境調査の早期実現」を町議会に請願し、原発誘致運動に先鞭をつけたことが知られています。また、昭和42年（1967）には青年部、昭和54年（1979）には婦人部（現女性部）が発足しました。

令和3年（2021）度現在の大間商工会の活動には、次の

図表 4-21 商工会 会員数の推移

(単位：人)

年度	会員数
平成元	249
平成2	251
平成3	245
平成4	250
平成5	254
平成6	260
平成7	254
平成8	250
平成9	245
平成10	240
平成11	241
平成12	241
平成13	243
平成14	238
平成15	230
平成16	230
平成17	230
平成18	230
平成19	230
平成20	229
平成21	236
平成22	236
平成23	226
平成24	224
平成25	214
平成26	208
平成27	212
平成28	210
平成29	209
平成30	208
令和元	209
令和2	209
令和3	214

3月31日現在の一般・特別会員数  
資料：大間町商工会

ような事業や委託事務も含まれています。

労働保険事務組合 大間町商工会スタンプ会 県証紙取り扱い 大間町観光協会 むつ法人会北通支部 むつ青色申告会大間支部 青森火災共済協同組合 青森県中小企業共済協同組合 記帳機械化事業 商工貯蓄共済 小規模企業共済 中小企業退職金 中小企業倒産防止共済 商工会珠算検定 連合大売り出し 交通障害保険

会員数は昭和50年代半ばから平成初期まで250人前後で推移し、平成7年（1995）には254人でしたが、以降、緩やかな減少に転じ、平成30年（2018）時点で208人となっています。

平成22年（2010）には設立50周年を迎え、同年10月15日、記念式典・祝賀会を開催し、当時の松山義文会長が「土魂商才を合言葉に会員、地域の皆様と共に様々なイベントを通じて触れ合ってきました。地域振興に深く関与し、大間町には無くてはならない経済団体として自負しています。今後も役職員一丸となり、未来に向かって力強く歩み続けていきたい」（「広報おま」平成22年12月号）と語りました。



商工会設立50周年記念式典



同 祝賀会の様子

**新会館の建設** 創立時の商工会館は建設から半世紀が過ぎて老朽化が激しく、新築が必要となりました。新しい商工会館は木造亜鉛メッキ2階建てが設計され、旧会館の解体費、本体工事費、備品等購入費を合わせて概算総事業費約7,500万円でしたが、平成28年（2016）6月の大間町議会臨時会で町から6,000万円の支援が決定されました。

平成29年（2017）3月31日に建物が完成し、完成記念式典と内覧会を経て業務を開始しました。2階の階段や壁、会議室など、内装には青森ヒバが使用されています。



旧大間町商工会



大間町商工会館

図表4-22 歴代商工会長

歴代	氏名	在任期間	
初代	木村 力衛	昭和35	～ 昭和39
2代	樋口源太郎	昭和40	～ 昭和45
3代	宮野慶毅司	昭和45	～ 昭和55
4代	遠藤 賢治	昭和56	～ 平成3.5
5代	正根 政雄	平成3.5	～ 平成6.2
6代	角野 哲夫	平成6.5	～ 平成12.5
7代	畑山 昭男	平成12.5	～ 平成14.12
8代	松山 義文	平成15.5	～ 平成24.5
9代	傳法 清孝	平成24.5	～ 平成27.3
10代	長谷 龍二	平成27.5	～ 平成28.12
11代	米澤 誠	平成29.5	～ 現在

## 2 小売業の現状

**小売業の推移** 大間町の平成6年（1994）における小売業・卸売業の推移を見ると、商店数108店（小売業103、卸売業5）、従業員数379人（小売業350人、卸売業29人）、年間販売額61億8,700万円（小売業54億1,400万円、卸売業7億7,300万円）でした。20年後の平成26年（2014）は商店数62（小売業47、卸売業15）、従業員数365人（小売業311人、卸売業54人）、年間販売額73億2,900万円（小売業53億400万円、卸売業20億500万円）となっています（図表4-23）。

また、小売業を中分類別に見ると、平成6年（1994）では飲食料品小売業が商店数44店、従業員数138人、年間販売額22億9,400万円以最も多く、これに、織物・衣服・身の回り品小売業（商店数6店、従業員数27人、年間販売額4億1,400万円）、家具・じゅう器・家庭用機械器

具小売業（商店数11店、従業員数32人、年間販売額 3 億6,400万円）が続いていました。

平成26年（2014）になると、飲食料品小売業（商店数10店、従業員数104人、年間販売額18億7,400万円）に続き、家具・じゅう器・家庭用機械器具小売業（商店数 5 店、従業員数28人、年間販売額 2 億1,900万円）、織物・衣服・身の回り品小売業（商店数 5 店、従業員数14人、年間販売額 1 億1,000万円）となっています。

**購買力の流出** 購買力の流出動向から大間町の商圏を見ると、平成 6 年（1994）における全購買力の50.6%はむつ市に流出するなど、町内への滞留は43.1%にとどまり、購買力の流出傾向は平成初期から際立っていました。その後、町内の商店等の事業者の高齢化、大型店舗の移入などにより、衰退していきました。

平成18年（2006）になると、全購買力のうち67.2%がむつ市に流出し、町内への滞留は22.8%と、購買力の流出は一層強まりました。また、食料品については平成 6 年には90.9%の町民が食料品を町内で購買していたものが、平成18年（2006）には75.3%となるなど、食料品についても地元指向が大きく減少しています。地元商店の満足度については、食料品では「十分満足」「ほぼ満足」合わせて68.4%と、約 7 割の町民は満足しているようです。

図表 4-23 小売業の現状

分類	区分	商店数（店）		常時従業者数（人）		年間販売額（万円）	
		平成 6	平成26	平成 6	平成26	平成 6	平成26
合計		108	62	379	365	618,711	732,900
卸売業計		5	15	29	54	77,295	202,500
小売業計		103	47	350	311	541,416	530,400
各種商品小売業		-	-	-	-	-	-
織物・衣服・身の回り品小売店		6	5	27	14	41,440	11,000
飲食料品小売業		44	10	138	104	22,932	187,400
自動車・自動車小売業		4	5	10	28	8,755	21,900
家具・建具・じゅう器小売業		11	-	32	-	36,425	-
その他の小売業		38	26	143	161	225,414	-
無店舗		-	1	-	4	-	-

資料：青森県の商業

図表 4-24 小売業の推移

分類	年	平成 6	平成14	平成16	平成19	平成26
年間販売額（万円）		541,416	561,555	574,130	613,026	530,400
商店数（店）		103	96	89	82	62
従業員数（名）		350	393	380	363	365
売り場面積（㎡）		7,193	7,161	8,251	7,255	6,550

資料：青森県の商業

## 3 工業

**工業の現況** 平成28年（2016）の従業員4人以上の事業所について見ると、事業所数は7事業所、従業者は44人、製造品出荷額21億6,918万円、粗付加価値額は3億7,767万円です。1事業所当たりで見ると、従業者6人、製造品出荷額3億988万円、粗付加価値額5,395万円です。ちなみに県の平均である、従業者41人、製造品出荷額13億9,776万円、粗付加価値額5億491万円と比較すると、20%程度の極めて低い水準にとどまっています。

また、平成24年（2012）と比較すると、事業所数は増減なし、従業者数は24人減少、製造品出荷額は約9億1,000万円の増加となるなど、大間町の工業は平成期を通じて緩やかに縮小しています。

**水産加工** 大間町の水産加工は海藻類の一次加工が主体であり、加工経営体としての漁家も含まれます。主な加工品は、コンブ、ワカメ、エゴノリ、テングサ、アカハタとなっています。

漁家以外の加工専門業者は5社あり（現在確認できる専門業者数）、大正時代からの乾鮑加工や、近年はミズタコ、ワカメ、モズク、干コンブ、アラメ、ウニなどの加工を行っています。

**木材工業** 現在、製材業は大間地区に1社が立地しています。大間町をはじめ下北半島には貴重な資源として、「青森ヒバ」があり、日本三大美林の一つです。青森ヒバは堅牢で腐りにくく、シロアリにも強い特性を有しています。しかし、成木になるまで200～300年の歳月を要するため、資源の有効活用が課題です。青森ヒバの加工については、大間民芸物産センターで昭和60年（1985）から試験・研究がなされ、展示・販売が試みられていました。昭和63年（1988）6月に設立したヒバ開発株式会社がヒバの天然有効成分「ヒノキチオール」や芳香成分の特徴を活かした健康安眠枕「ひば眠」、天然芳香剤「ひばの森」を販売しました。平成9年（1997）には化粧品製造業許可を取得し、青森県と共同開発の原料を使用した保湿クリームをはじめ、自社独自のスキンケア商品等の多種多様な「青森ひば」製品を製造・販売しています。



浴用商品（ボディソープ、シャンプーなど）、スキンケア商品



雑貨品（除菌・消臭・芳香スプレー、ひば油など）

各種水産加工品



おこっぺもじゆく



コンブ加工品



たこ足



だし昆布



つるっこあめ、つるっこラーメン



マグロの缶詰



いか塩辛、塩うに、アワビの水煮



大間のふのり

図表4-25 工業の推移

年度	区分	事業所数 計	規模別			従業員数 (人)			製造品出荷額等 (万円)			
			4人~ 9人	10人~ 19人	20人~ 29人	計	男	女	合計	製造品 出荷額	加工賃 収入額	その他 収入額
平成18		8	5	2	1	91	55	36	165,316	165,316	-	-
平成24		7	3	4	-	68	51	17	125,696	89,677	2,019	34,000
平成28		7	7	-	-	44	26	18	216,918	123,960	5,141	87,817

※法人・個人含む

※市町村別事業所数・従業員統計数より

資料：青森の工業

## 4 産業構造の変化

**産業構造の変化** 平成期に入ったばかりの平成2年（1990）の大間町の就業人口は、国勢調査結果によると3,271人で、就業率は45.9%。その産業別構成を見ると、第1次産業が41.3%（1,350人）、第2次産業が22.1%（724人）、第3次産業が36.6%（1,197人）でした。

四半世紀後の平成27年（2015）には、就業人口は2,569人と平成2年（1990）の78.5%に減少していますが、就業率は49.1%に向上しています。産業別構成では、第1次産業が23.8%（612人）、第2次産業が22.0%（566人）、第3次産業が54.2%（1,391人）。第1次産業が大きく減少する一方、第3次産業に従事する人の割合が増加し、就業者の半数以上を占めていることが特徴です。

一方、青森県の平成27年（2015）のデータと比較してみると、県は、第1次産業が12.0%（7万5,116人）、第2次産業が19.8%（12万3,972人）、第3次産業が65.1%（40万7,500人）であり、大間町は第1次産業の割合が県平均のほぼ2倍、第3次産業は県平均より10ポイント低くなっていることが分かります。第1次産業が減少していくのは日本全国共通の傾向ですが、大間町では水産業が基幹産業であるだけに、減少は進んでいるものの県平均を大きく上回る状況です。

**第6次産業化** 近年、農林漁業では、他の産業との結びつきにより、生産（第1次産業）から加工（第2次産業）、流通販売（第3次産業）を総合的に行う第6次産業化が注目されるなど、社会のニーズに応じた新たな産業形態が生まれています。

大間町では、すでにブランドとなっているマグロに加えて地域資源を見直し、発掘して加工・製造・流通・販売の連携を強化することで、付加価値を高めて第6次産業化を展開。具体的には、大間牛（陸まぐろ）、オコッペいもっこの積極的な商品化を促すとともに、公民が力を合わせ地方創生に関するさまざまな議論を行う「大間・まぐろ町会議」の取り組み、ふるさと納税の返礼品による特産品のPR、ツルアラメなど海藻類の成分調査研究・商品開発などが行われています。

## 第6節

# 観光と特産品

## 1 観光スポットと特産品

**観光スポット** 大間町は本州最北端に位置し、北海道への玄関口ともなっていることから観光を重視し、施設の充実に努めてきました。しかし、観光客の多くが大間町を通過点と見なしている状況が続いていることに変わりはないようです。そのため、大間町では、通過客を宿泊客に変えることに力を注いできました。現在、大間町には次のような観光スポットがあります。

### 【下北半島国定公園】

大間崎は本州最北端（北緯41度33分、東経140度54分）に位置し、「こゝ本州最北端の地」と刻まれた碑は、町のシンボルとなっています。晴れた日には、北海道が一望でき、対岸の汐首岬まで17.5kmです。この碑の沖合600mに浮かぶのが周囲約1.8kmの弁天島で、無人島の同島には本州最北端の灯台、大間埼灯台が建っています。弁天島はカモメ類の集団繁殖地でもあり、特に海に突き出た岬は移動中の渡り鳥が集まりやすい場所です。大間崎と弁天島の潮流は速すぎて、これまでに泳ぎ切った者はいないともいわれるほどです。石川啄木が詠んだ「東海の小島の磯の白砂に われ泣きぬれて 蟹とたわむる」の原風景は、函館ではなく弁天島との説も存在します。

この一帯は昭和43年（1968）7月、下北半島国定公園の一部に指定され、同45年4月、下北半島に国道279号が開通しました。下北半島への分岐点となる野辺地町と大間町の間約100kmの道路は完全舗装され、「むつはまなすライン」と命名されています。



石川啄木歌碑



むつはまなすライン

## 【西吹付山展望台～シーサイドキャトルパーク～】

西吹付山には、大間地区や津軽海峡、いさり火や函館の夜景を眺めることができる展望台があり、すそ野には大間牧場（内山牧野）が広がっています。山頂には、紀行家・大町桂月の歌碑が建っています。

大間崎 空と海に長き蝦夷が島  
消えてかはりぬ漁火の影



大町桂月の歌碑

## 【赤石海岸】

国道338号線を大間から佐井方面に車で15分。大小の奇岩が海中から突き出して、自然のつくりだした彫刻と呼べる独特の風景が広がり、特に夕景は秀逸です。四季を通じて釣り人が訪れます。

## 【津鼻崎公園】

大間町と佐井村の境にあり、切り立った岸壁は自然の醍醐味を感じさせます。下北ジオパークポイントで奇岩の高台から見る光景は爽快です。初夏に鮮やかな黄色の花を咲かせるニッコウキスゲの群生地で、遊歩道が整備されています。

## 【材木岩】

赤石海岸から津鼻崎へと続く火山岩の柱状石群の総称です。材木状の岩石が立ち並び、材木地区では屋根の重しや石垣の材料にも使われています。

## 【大間牧場】

かつて牧場と呼ばれていた藩政期から続く馬の放牧地、奥戸野と大間野は戦後の農地改革により農地に変わり、昭和44年に畜産振興のために、大間地区の内山（森林地帯）を開放開拓し、牛の放牧場としたのが町営大間牧場（内山牧野）です。町の繁殖育成センターがあります。

## 【大間温泉】

本州最北端に湧く温泉で、広く活用すべく、昭和56年（1981）8月には大間温泉養老センターが、昭和57年（1982）8月には大間町温泉海峡保養センターがオープンし、宿泊施設やレストランもあります。



赤石海岸



津鼻崎公園



材木岩



大間町海峽保養センター

**特産品** 水産業の盛んな町にふさわしく、海の資源を原料とするトロロコンブ、出汁コンブ、ワカメ、するめなどが有名です。町のブランド大間まぐろは、かつて市場に直送されたため大間町で食すことはできませんでしたが、現在は「マグロを食べに行く町」として、大間観光の重要な一要素となっています。マグロのDHAが入っている「マグロー筋ブッセ」や血合いを使った「マグロバーガー」、その他マグロの缶詰などの加工品も人気です。マグロの水揚げは、大間漁業協同組合大間港荷揚げ場、下手浜漁港荷揚げ場や奥戸漁業協同組合荷揚げ場で見ることができます。マグロの解体ショーは、8月開催の「大間ブルーマリノフェスティバル」、9～10月の日曜日開催の「日曜日はマグロだDAY」で大間漁業協同組合旧冷蔵庫で見学することができます。また、令和3年（2021）には、地元で水揚げされるアブラメの身を使ったカツが町内の飲食店で食されています。近年、本マグロの大トロにも負けない最高等級のA5に評価される肉質が評判の大間牛（陸マグロ）が新たな特産品です。森林王国である青森県内に生育してる「青森ヒバ」の木工品（花立て・抹茶茶碗・ヒバ入り枕）や精油を配合した化粧品などは、観光客の土産品として珍重されています。

農産物では、「三円薯」という馬鈴薯の品種を栽培し、商品名を「オコッペいもっこ」と称し町産業祭で販売されるほか、イオンリテール株式会社と提携し全国へ販路拡大しています。

大間ブルーマリンフェスティバル



舟競走



解体ショー用のマグロ



観客も一緒によさこいソーラン【よっちょれ】



試食マグロの配布風景



花火大会



花火大会

## 2 観光の推移

**観光の現状と問題点** 大間町の観光資源のうち、自然資源としては前述のように本州最北端として有名な大間崎と、潮が川のように流れるクキド瀬戸の沖合いに浮かぶ弁天島と最北の大間埼灯台があり、遠く北海道南部の連山や函館の明かりが望める景勝地として下北半島国定公園

に指定されています。津鼻崎や赤石海岸、材木岩など、優れた景観の海岸線が多く、また、大滝山や目滝山などの山間部は、ブナ、ヒバ（ヒノキ・アスナロ）といった天然林に覆われ、奥戸川流域にはニホンザル・ニホンカモシカが多く生息しています。

山間部から海岸にかけての丘陵に位置しているのが、大間牧場や大間町海峡保養センターのある内山公園です。大間町海峡保養センターは、大間温泉を利用した宿泊・日帰り温泉施設で56人を収容可能、ほかに宿泊施設として旅館・民宿・ホテル合わせて12軒があります。

また、本州最北端のキャンプ場として大間崎テントサイトが大間崎の駐車場隣接地にあり、炊事棟や公衆トイレを完備しています。

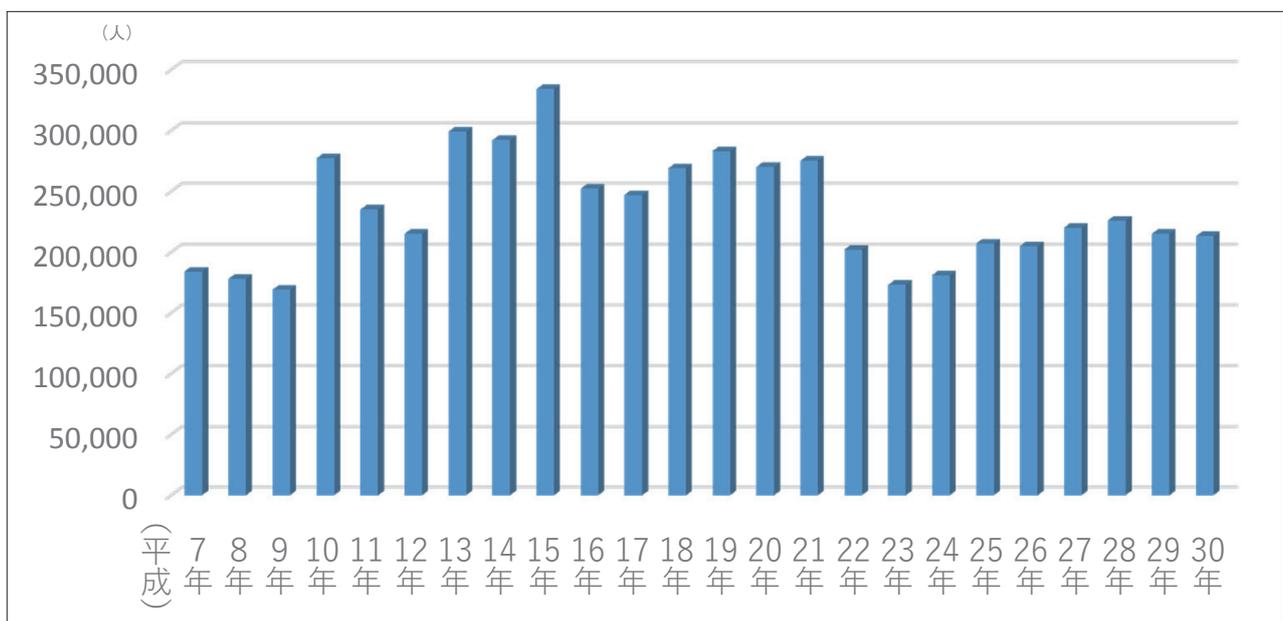
人文資源としては、文化財と祭事が挙げられ、文化財としては縄文晩期のドウマンチャ貝塚をはじめとして、貴重な資源が数多くあり、特に希少価値の高い天妃神の像があります。

このように、大間町の観光資源は、自然資源にも豊富な資源を持つが未開発であり、人文資源も整備が進んでいません。本州最北端の地である大間崎に代表される海岸線に主として資源が求められ、宿泊滞在型観光を支える利用施設・資源の少ない海岸美景勝地型、自然資源依存型となっていて、そのポテンシャルを十分に生かしきれていない状態にあることが課題です。

**観光客の動向** 平成30年（2018）の大間町への観光客の入り込み数は、21万3,619人です。このうち約91%が日帰り客で、滞在時間の短い立ち寄り観光型を示しています。東日本大震災が発生した平成23年（2011）の観光客入込客数は17万3,000人にまで落ち込んでいたが、現在は平成22年（2010）の20万2,000人をやや上回り、震災前の水準を回復しました。しかし、平成15年（2003）には33万4,000人を記録したこともあり、さらに増加できる可能性があります。

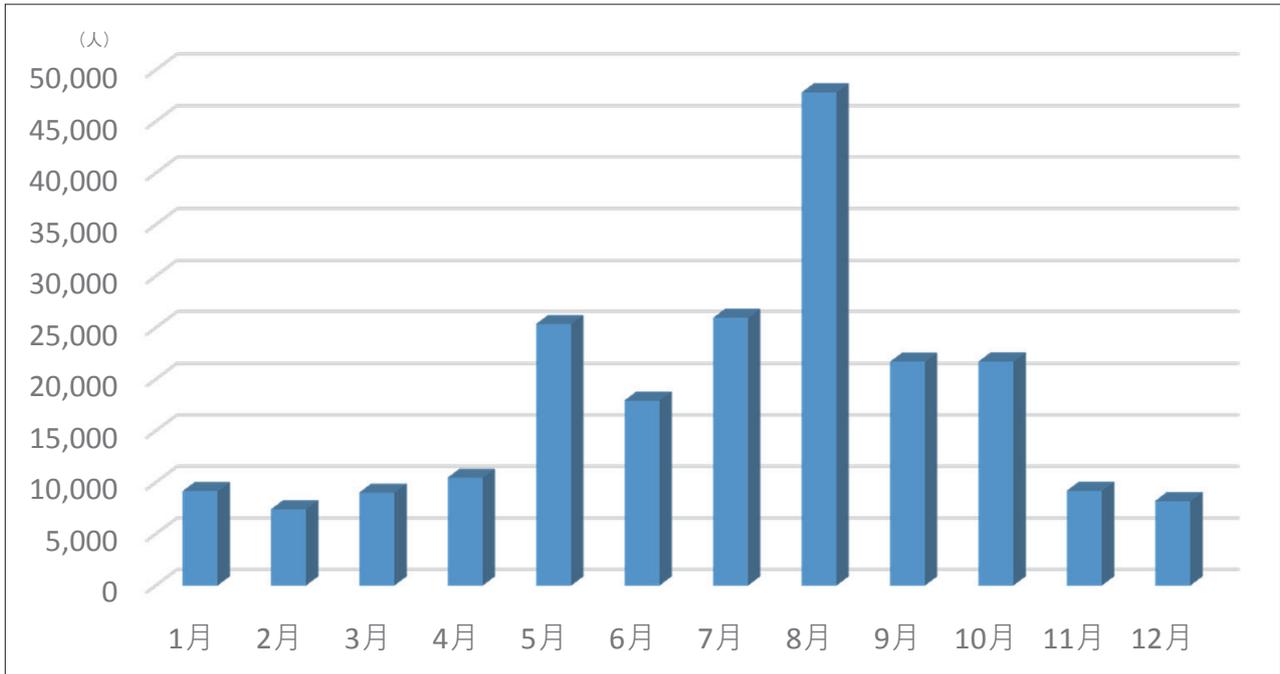
平成12年（2000）のデータでは、県外客は7.9%に過ぎず、ほとんどは県内客です。入込客

図表4-26 観光入込客数の推移



資料：青森県観光統計概要

図表4-27 平成30年度の月別入込客数



資料：青森県観光統計概要

数の季節変動について見ると、5月から10月に全入込客数の75.3%が訪れ、なかでも8月の1か月間に年間の22.4%を占める夏季型の入込動向を示しています。

宿泊客は、平成30年（2018）は全体の約8.1%であるが、平成12年（2000）が14.0%、昭和63年（1988）はわずか5.8%であったことを考えると、少しずつではあるものの増加しています。大間マグロや大間牛（陸まぐろ）を宿泊時に食べたいというニーズに応える態勢ができつつあることを示しているといえるでしょう。宿泊滞在型観光を支える資源・施設のさらなる充実、既存観光施設の基盤整備を進めていく必要があります。

### 3 観光PR

**PRの強化** 観光振興の具体化に際しては、施設整備を先行させることに加えて、「北海道南端よりも北に位置する本州最北端の町」であること、「北限のニホンザルの生息地」などといった大間町の観光特性を積極的にPRし、集客に生かす必要があります。

したがって、行政や商工会が積極的にPRに努めるのはもちろん、宿泊客の再訪を誘うことや住民の温かいもてなし、交流などを促進することによって、観光客の誘致を図っていくことが必要です。

**広域観光ルートの整備** 平成28年（2016）の北海道新幹線開業をはじめモータリゼーションの進展と交通体系の整備に伴い、観光客の滞在可能時間が増大し、広域的な観光活動が可能となることから、町内のみならず下北半島全域、北海道道南地域を含めた広域観光の設定を図る

とともに、観光客の利便性を考慮した観光案内標識の整備などに努めてきました。

こうした広域観光の取り組みを行っているのが、平成27年（2015）10月に設立された「一般社団法人しもきたTABIあしすと」（設立時は、一般社団法人下北観光協議会）。これは、国土交通省観光庁によって同時期にスタートした観光地域づくり法人（DMO）制度に基づく法人として立ち上げられたものでした。誘客や旅行消費拡大を目指し、地域の多様な関係者を巻き込みつつ、KPIの設定やPDCAサイクルの確立など科学的アプローチを取り入れた観光地域づくりを行うかじ取り役となる法人です。

しもきたTABIあしすとは、昭和43年（1968）に下北半島が国定公園に指定されたことを契機に設立された下北観光協議会を母体とし、むつ市・横浜町・大間町・東通村・風間浦村・佐井村を対象エリアとしています。DMOとなる以前から、広域観光案内冊子「ぐるりんしもきた」の発行や、平成21年（2009）度からは主要な観光地をめぐる「ぐるりんしもきた観光ルートバス」の運行を行ってきました。

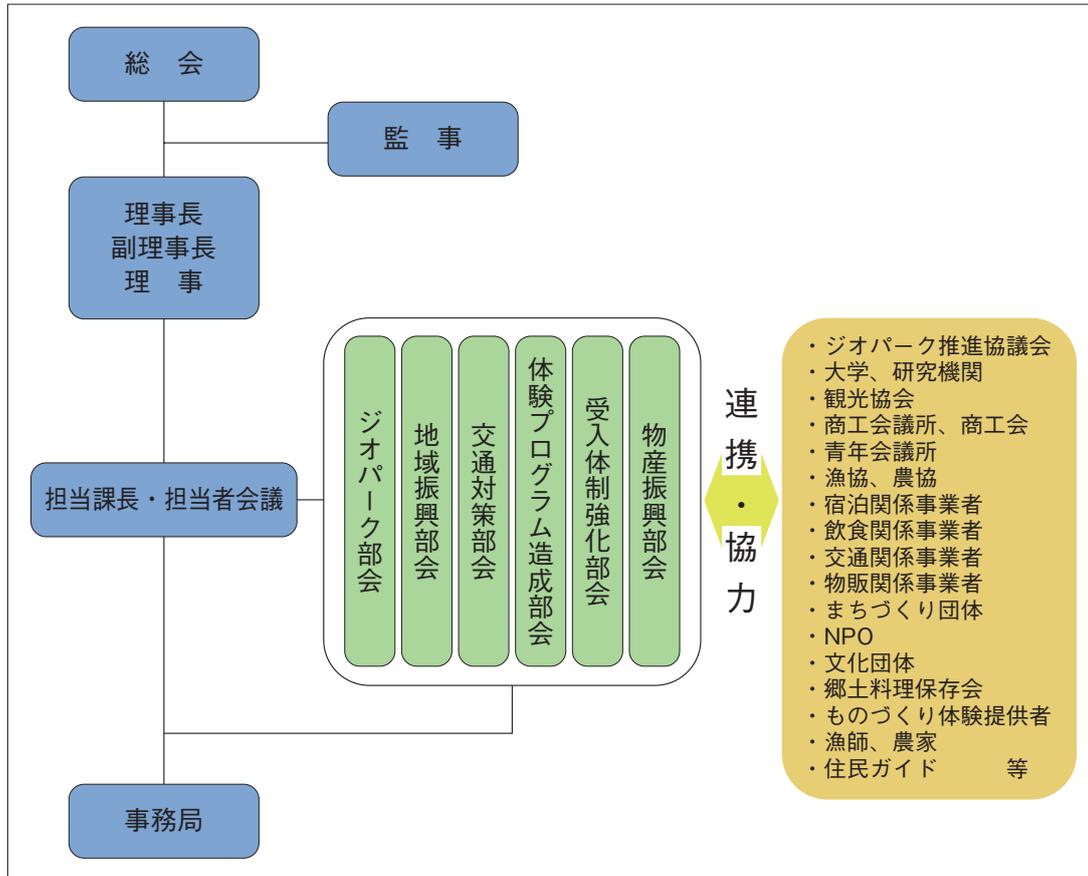
平成27年（2015）にDMOとなってからは、エリア内の各観光協会・商工会・その他各種観光組織と連携し、旅行プランの提供、宿泊交通手段の手配など、旅行者と旅行商品提供者をつなぐワンストップ窓口としての機能を果たすことを目的として活動しています。従来から運行してきた観光ルートバスを着地型旅行商品として販売することに加え、多様な旅行プランを開発・販売してきました。その一部は次のような内容です。

- ① 下北ジオパークのガイドとともに各ジオサイトをバスと遊覧船でめぐる「下北ジオパークツアー」
- ② 漁師の網起こし作業を体験できる「定置網漁獲体験ツアー」
- ③ ガイドとともに飲み屋街をめぐる「田名部の夜まちあるきツアー」
- ④ マグロで知られる「大間の浜まちあるきツアー」
- ⑤ 下北ジオガストロノミーをコンセプトとする絶景と最高の食を融合させた「下北ジオダイニング」

平成28年（2016）度から、JR下北駅前広場内の観光案内所を運営するとともに、ウェブサイトの改良、レンタサイクル事業、観光案内所JNTO認定を進めているところです。

下北エリアへの観光客入込数はDMO発足以前の平成26年（2014）の146万3,171人でしたが、DMOが本格稼働し、また北海道新幹線が開通した平成28年（2016）には150万4,151人へと増加したものの、その後は微減傾向となり、平成30年（2018）は140万5,751人となっています。一方、宿泊客数は平成28年（2016）の16万276人から平成30年（2018）の24万3,979人へと大幅な増加を達成しました。

図表4-28 日本版DMO実施体制図（しもきたTABIあしすと）



## 4 大間町観光協会

**情報配信とイベント開催** 観光協会は、地域内の観光振興を目的とする団体です。大間町観光協会は、昭和53年（1978）4月に大間町商工会内に設置されました。

観光イベント・キャンペーンの実施、インターネットやパンフレットなどを利用した観光スポット・コース・物産などのPR、大間崎レストハウスの運営、観光地美化活動などを主な事業としています。

ホームページ「大間観光情報サイト 大間わいどアップ」を運営し、サイト内で「マグロのまち『大間』」を強く打ち出すとともに、観光スポットやグルメ、宿泊施設、イベントなどの情報をPRしてきました。SNS時代の潮流を背景に、blog（ブログ）やTwitter（ツイッター）、Facebook（フェイスブック）（大間わいどアップ速報版）による情報配信も行っています。

また、4月から10月にかけて観光協会が運営する大間崎レストハウスは、本州最北端の大間崎に立地し、三方がガラス窓で囲まれ、津軽海峡や大間崎灯台のある弁天島、雄大な北海道の

山々を望めるスポットで、観光案内所を併設しています。無料休憩所としても利用できるほか、レストハウスが発行する大間町観光協会オリジナルの「本州最北端到着証明書」が好評です。

主催する行事としては、恒例の内山公園桜まつりがあります。開催は5月中旬で、青森県内でも最も遅い桜の開花です。牧場で育った特産の大間牛（陸マグロ）を炭火で食すイベントが大人気であり、カラオケ大会、郷土芸能、歌謡ショーなどで終日盛り上がります。

平成8年（1996）7月には、大間町に天妃様を祀る祠が元禄9年（1696）に創建され300周年に当たる記念すべき年であることから、天妃神遷座300年祭の天妃行列を実施しました。それまで長年にわたって不漁だったマグロ漁が、この祭りをきっかけに豊漁となったとされています。以来、国民の祝日である海の日に、観光協会によって大漁祈願祭とともに行われるようになりました。

天妃様は、台湾などで媽祖<sup>まそ</sup>と呼ばれている海上守護の女神ですが、当時の名主が水戸藩那珂湊から遷座したという説が有力で、明治時代に大間稲荷神社に合祀されました。こうした歴史を持つためか、異国情緒漂う行列が繰り広げられます。



桜まつりの様子（平成28年）



大間崎レストハウス

図表4-29 歴代観光協会長

歴代	氏名	在任期間
初代	宮野慶毅司	昭和53.1 ~ 昭和57.12
2代	遠藤 賢治	昭和58.1 ~ 昭和62.12
3代	長谷 武男	昭和63.1 ~ 平成5.12
4代	大見 光男	平成6.1 ~ 平成30.10
5代	大見 義紀	令和元.5 ~ 現在

## 5 観光大使とキャラクター

**観光大使** 平成25年（2013）10月、町の観光資源に関する魅力ある情報を発信し、町の知名度の向上と観光産業の発展を図るため、大間町観光大使を設置することとしました。観光大使は、観光行政推進に積極的な大間町出身者、または町に縁のある者で、町長が必要と認める者です。任期は1年以内で、辞退の申し出がなければ再任されます。

同年10月、初の観光大使として大間町（奥戸）出身の落語家、三遊亭大楽さんが任命されました。平成21年（2009）



三遊亭大楽さん初代観光大使に

に真打に昇進し、落語に加え講演、執筆、司会と多彩な活動ぶりが知られています。就任に当たっては「大間を題材にした創作落語を作りたい！マグロだけじゃない大間のものをアピールしていきたい」と意気込みを語りました。

平成27（2015）年3月には、女優の田畑智子さんが2人目の観光大使に任命されました。大間が舞台となったNHK朝の連続ドラマ小説『私の青空』（2000年）でヒロインの「なずな」を演じたのが田畑さんです。「大間は第2の故郷」と言う田畑さんは、同年12月、旅番組のロケで大間町を訪れ、「帰ったら広く大間をPRします。マグロ一筋Tシャツを着てお芝居のお稽古に行きます！」と話しました。

令和4年（2022）5月、演歌歌手の福田こうへいさんが3人目の観光大使に就任しました。同年1月に福田さんがリリースしたシングル「一番マグロの謳」は、大間町のマグロ一本釣り漁師である熊谷義宣さんが作詞したものです。地元のマグロ漁師らから推薦の声が上がり、観



2人目の観光大使 田畑智子さん



3人目の観光大使 福田こうへいさん

光大使委嘱に結びつきました。委嘱状交付式で、福田さんは「これからも、歌を通して大間に来てくださる皆様に町のPRをしていきたい。そして大間町の皆さんを元気にしたい」と意欲的に語りました。

**イメージキャラクター** 新語・流行語大賞では、平成20年（2008）に「ゆるキャラ」がノミネート、平成25年（2013）に「ご当地キャラ」がトップテン入りするなど、地域おこしや名産品の紹介、イベント、各種キャンペーンなど、地域のPRに「ゆるキャラ」(ゆるいマスコットキャラクターの略)、「ご当地キャラ」が一種のムーブメントとなっています。

大間町では、平成26年（2014）7月に町公認のイメージキャラクターとして「かもまーる」が誕生しました。町の鳥である「かもめ」とスペイン語で海を表す「mar」を組み合わせたネーミングです。かもめをモチーフに、頭に日本の灯台50選に選ばれた大間埼灯台が、お腹には名産品の大間マグロをチャンピオンベルトがわりにつけて、大間町をPRすることとしました。翌平成27年（2015）3月の大間町健康宣言セレモニーで初登場以来、町のPR活動に活躍中です。



かもまーる

**【プロフィール】**

**名前&由来** かもまーる（町の鳥かもめ+mar スペイン語で海という意味から）

**生年月日** 平成26年7月21日（海の日に大間埼の灯台がある弁天島で生まれる。）

**特徴** 町の鳥、かもめをモチーフに、頭に日本の灯台50選に選ばれた大間埼灯台が、お腹には名産品の大間マグロをチャンピオンベルトがわりにつけて、大間町をPRいたします。

## 第 7 節

## 産業施設

## 1 畜産・農業・漁業関連施設

**大間町畜産物加工センター** 【大間町大字大間字内山48-1/266.73㎡】

大間町で生産された畜産物の付加価値を高めるため、加工と特産品開発を行い、地域畜産の振興を図る施設で、平成7年（1995）1月、大字大間字内山に完成しました。

**大間町畜産資料展示施設** 【大間町大字大間字内山48-1/216.13㎡】

大間町宮内山牧野の来訪者を対象に、畜産業への理解を深め、親しんでもらうため資料展示や研修を行う施設で、平成6年（1994）3月に完成しました。大間町畜産物加工センターと同一敷地内にあります。

**大間町特産品加工保管施設** 【大間町大字奥戸字大川目242-2/329.97㎡】

大間町で生産されている農産物の通年販売の促進と加工製品開発のための知識・技術を修得し付加価値を高め、地域活性化を図るための拠点として、平成5年（1993）3月、大字奥戸字大川目に設置されました。オコッペいもっこ等の農産物の加工を手がけています。

**大間町漁業活性化センター** 【大間町大字大間字割石埋立地/299.77㎡】

漁村振興の拠点的な施設として、漁業の生産性及び生産力の強化による沿岸漁業の活性化と振興を図るため、平成7年（1995）2月、大字大間字割石埋立地に設置されました。

**北通り種苗育成センター** 【大間町大字大間字奥戸下道45-100/1,233.44㎡】

大間町水産振興計画「リフレッシュマリン大間計画」と大間原子力発電所の地域共生施策の一環として、平成9年（1997）5月に設置されました。アワビ大型種苗、コンブ種苗といった種苗の生産・育成、漁業者への栽培技術指導などの人材育成を実施し、北通り地域の水産振



大間町畜産物加工センター



大間町畜産資料展示施設



大間町特産品加工保管施設



大間町漁業活性化センター

興を図る施設です。漁場調査の結果に基づきアワビ稚貝放流の適地、漁場、面積などを勘察して種苗生産・中間育成できる施設規模で、鉄骨造一部鉄筋コンクリート造平屋建てで、延べ床面積は1,223.44㎡です。エゾアワビ種苗30mmサイズを50万個生産可能であり、かつてアワビの宝庫と称された大間の海をよみがえらせる期待が寄せられた施設となっています。

**北通り製氷施設** 【大間町大字大間字下手道59-1／768.25㎡】

北通り3町村6漁協を対象とした共同製氷施設として、平成9年（1997）2月、大字大間字下手道に完成しました。鉄骨造一部2階建てで延べ床面積は768.25㎡、製氷能力は32t（日産）、貯氷能力233t（日産）となっています。盛漁期の氷消費量に十分対応でき、氷の安価・安定・迅速な供給に貢献してきました。

**大間町農村婦人の家** 【大間町大字奥戸字材木川目32／325.62㎡】

昭和60年（1985）2月に大字奥戸字材木川目に設置された施設です。農村女性の生活改善に関する知識・技術習得を目的とする共同学習や農産物加工をはじめ多彩な活動に利用されています。

**大間町町営牧野** 【大間町大字奥戸字二ツ石・大字大間内山48-1・大字奥戸字小川代】

大間町に在住し、家畜を飼育する畜産事業者が利用できる施設です。放牧期間は毎年5月10日～11月10日まで。町営牧野として二ツ石、内山、奥戸の3か所があります。



北通り種苗育成センター



北通り製氷施設



大間町農村婦人の家



大間牧場

## 2 観光施設

### **大間町海峡保養センター** 【大間町大字大間字内山48-1／2,655.66㎡】

本州最北端に湧く温泉である大間温泉を広く活用するため、昭和57年（1982）8月、大字大間字内山に開業しました。平成25年（2013）度から指定管理制度を活用し、町内の民間会社が運営しています。

大間温泉の泉質はナトリウムカルシウム食塩泉・塩化物泉で泉温は46℃です。同センターでは日帰り温泉入浴と宿泊ができます。宿泊では、大間町の特産品である大間マグロや大間牛（陸まぐろ）、アワビなどを楽しめるプランを用意し、大間観光の拠点といえる存在です。これまで平成17年（2005）8月と令和3年（2021）3月にリニューアルを実施しました。

### **大間温泉養老センター** 【大間町大字大間字内山48-1／178.47㎡】

大間温泉の元湯を利用する日帰り入浴施設で、昭和56年（1981）8月に開業しました。公衆浴場のような素朴な施設ですが、源泉掛け流しのお湯はやや薄茶色で透明、金気臭がただよう本格的な温泉です。

**シーサイドキャトルパーク・西吹付山展望台** 【大間町大字大間字内山48-1】

シーサイドキャトルパークには、津軽半島や函館を望む眺望がすばらしい西吹付山展望台があります。展望台からは、大間の町や津軽海峡、いさり火や函館の夜景も美しい。パーク内には、旅を愛した明治の文人・大町桂月の歌碑「大間崎 空と海の上に長き蝦夷が島 消えてかはりぬ漁火の影」が建っています。

**大間崎レストハウス** 【大間町大字大間字大間平17-1/96.58㎡】

本州最北端の大間崎に位置する眺望抜群の施設で、観光協会が運営しています。観光案内所を併設し、4月下旬～10月下旬までオープンします。

**内山公園** 【大間町大字大間字内山48-1】

大間町海峡保養センターすぐそばの、自然豊かな公園です。毎年5月中旬に開催される桜まつりの舞台となります。テニスコート1面、遊歩道・遊具があります。

**津鼻崎公園** 【大間町大字奥戸字八森】

自然の醍醐味に満ちた、切り立った岩肌が見事で、頂上からの眺めは抜群です。初夏に鮮やかな黄色の花を咲かせるニッコウキスゲの群生地で、遊歩道が整備されています。



大間町海峡保養センター



大間温泉養老センター



シーサイドキャトルパーク



大間崎レストハウス



内山公園



津鼻崎公園

## 第 8 節

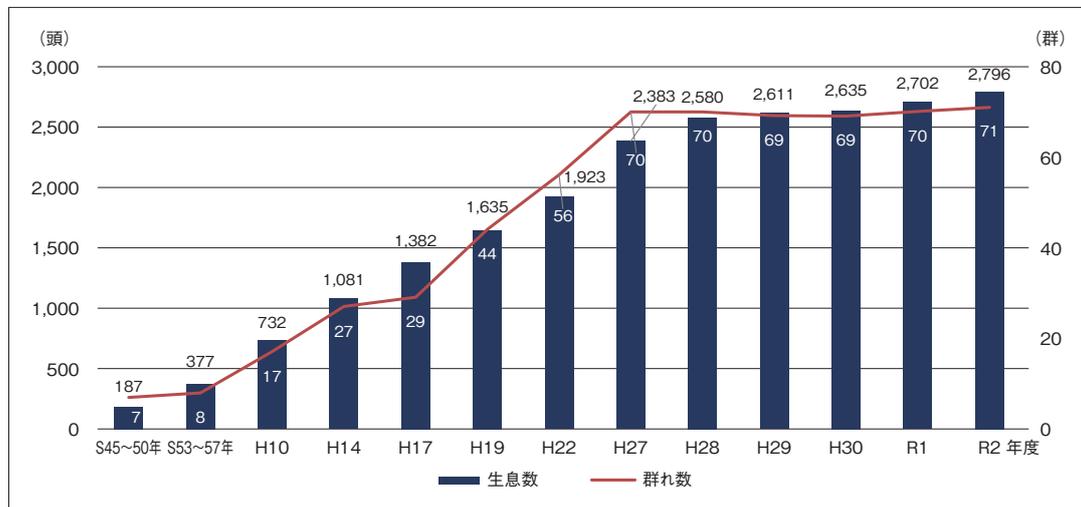
## 鳥獣対策

## 1 ニホンザルによる農作物の被害

**サルの生息状況** 下北半島に生息するニホンザルは、人以外で最も北に生息する霊長類です。昭和45年（1970）には、「下北半島のサルおよびサル生息北限地」として国の天然記念物に指定され、保護が図られてきました。

令和2年（2020）度に青森県が実施したモニタリング調査によると、下北半島に群れとして生息しているサルは71群、2,796頭 +  $\alpha$ です。その分布域は下北半島の南西部から北部にかけての4市町村（むつ市・大間町・風間浦村・佐井村）に偏り、約600km<sup>2</sup>に及ぶ範囲と推定されます。この地域個体群は、かつてはむつ市脇野沢など南西部の個体群と大間町など北西部の個体群に分かれていましたが、主として北西部の個体群の分布域が拡大したことによって、1990年代後半には1つにつながってしまいました。

図表4-30 下北半島ニホンザルの生息状況の推移



※むつ市脇野沢の野猿公苑内保護檻に収容されているA1群は除く。（出典：青森県自然保護課）  
資料：「第3次第二種特定鳥獣管理計画（下北半島のニホンザル）」青森県（令和4年3月）

**被害状況** 一方、ニホンザルの生息域に隣接する農地のほぼ全域で農作物被害が発生し、農家の生産意欲の減退を招くことに加え、一部地域では人的被害や生活環境被害も生じています。

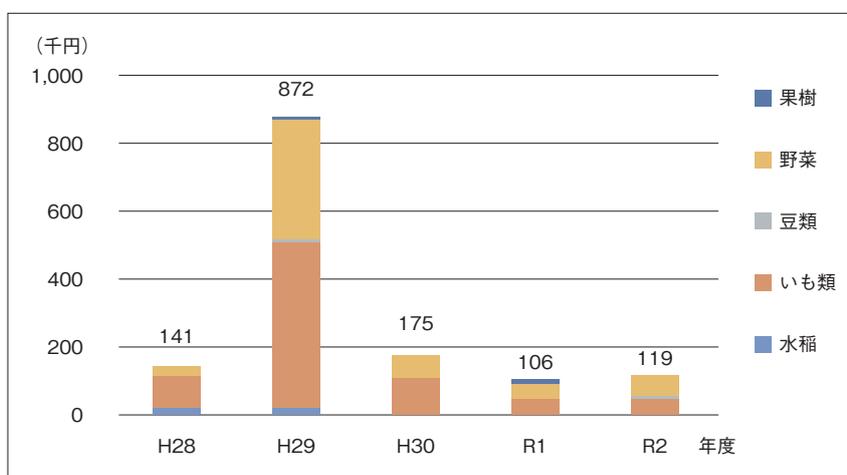
下北半島全体の農作物被害額は、平成13年(2001)度の約750万円から令和2年（2020）度には約84万円にまで減少。しかし、以前の群れの分布域は海岸部を中心としていたのに対し、近年は内陸部にも拡大し、農業地域に加え、家庭菜園にまで出没しているため、新たな被害を引

き起こすおそれがあります。被害作物は、稲、バレイショ、ダイコン、カボチャ、長ネギ、豆類、トマト、トウモロコシなど、特に野菜・イモ類が多くなっています。

耕作者などへの威嚇行為やけがなどの人的被害については、下北半島の4市町村全体で平成24～28年（2012～16）度にかけて14件、平成29年（2017）度～令和2年（2020）度にかけて11件発生しています。

人家への侵入、屋根の歩行、ガラス等の損壊といった生活環境被害については、4市町村全体で平成24～28年（2012～16）度にかけて33件でしたが、平成29年（2017）度～令和2年度にかけては173件と、急増しました。

図表4-31 大間町における過去5年間の農作物被害金額



資料：下北半島ニホンザルモニタリング調査報告書

**第3次第二種特定鳥獣管理計画** 青森県は下北半島に生息するニホンザルの地域個体群としての持続的な保全と、人的被害・生活環境被害の根絶による人との共存、農作物被害の軽減を図るため、これまで第1次第二種特定鳥獣管理計画（平成24～28年度）、第2次第二種鳥獣管理計画（平成29～令和3年度）を策定し、令和4年（2022）度からは新たに第3次第二種鳥獣管理計画（令和4年度～令和8年度、以下「管理計画」）を策定し、保全と被害の軽減に努めているところです。

管理計画では、主として次のような取り組みを重点的に行っています。

- ① 北限のサルの保護及び地元住民との共存に向けた対策をより一層推進。
- ② 土地管理区分（ゾーニング）に応じた被害予防対策、捕獲対策を進めること。
- ③ ニホンザルによる人的被害及び生活環境被害の未然防止を最優先に対処することとし、農作物の被害防止や固体及び群れ捕獲を含めたより多様な被害防止対策を行う。
- ④ 被害に迅速に対処するため、捕獲申請の判断は市町村に委ねるとともに、県及び市町村は専門的知識や技術を有する人材育成を推進する。
- ⑤ 県は、計画目標の達成に向け、市町村やNPOなどと連携を図りつつ、モニタリング調査

を実施し、計画の実行を点検・修正するフィードバックシステムを構築するとともに、捕獲業務に必要な専門知識や技術を習得する機会を創出する。

⑥ ニホンザルとの共存に向けた地域住民への普及啓発、合意形成に努める。

**電気柵の設置** 大間町では、平成10年（1998）度、材木地区で初めて被害が発生し、以降、年々被害地域が拡大していく傾向にあり、平成13年（2001）度から巡視員（現鳥獣被害対策実施隊）による追い払いを行ってきました。

さらに平成19年（2007）度以降、電気柵を継続して設置し、令和2年（2020）度時点で総延長は1万7,000mとなっています。電気柵の維持管理に関しては、耕作者による不十分な管理と老朽化による漏電などが確認され、更新や維持管理上の問題が課題です。

また、平成30年（2018）度からは追い上げ、追い払い業務を民間委託としています。早番・遅番体制の活動が功を奏し、農作物被害の軽減に結びつきました。

図表4-32 電気柵の設置状況



資料：産業振興課

